

# 玄洋社関係史料の紹介

石瀧 豊美

第17回

## 福岡表警聞懐旧談 (九)

郡利は筑前全域を結合し

た自由民権運動の組織、筑前共愛会(共愛会とか、筑前共愛公衆会とも言いま

す)の会長で、福岡日日新聞の社長にも就任します。玄洋社員で、後に玄洋社系の代議士。第七代玄洋社社長月成勲と、陸軍大将明石元二郎は、その娘婿です。

郡利が痔の病に苦しめられていたことは、明石元二郎の伝記に証言があります。郡保潔とも名乗っています。

このように、後には玄洋社の人々と同志関係にあったのですが、以下の記述で、郡は県令渡辺清に重用されたことで疑われ、越知彦四郎ら拳兵準備を進めている福岡士族から血祭りに上げられそうになったことがほのめかされています。

また、内田良五郎は平岡浩太郎の兄。内田良平はその子です。ここでは、内田の田原坂偵察の結果が、福岡士族の決起を促すことになる事情が語られています。

越知は西郷軍が田原坂を敗走したと知り、むしろそ

帰して、士族連一般の調和を図りし際なりしかば、見る所、止る所、自ら越知の輩と所見を異にし、彼等に反対敵視されつゝあり。越知は事を發するに臨み、軍の首途の祭として、決死の壮士を派遣し、反対党の首魁両三名を誅戮せしめんとせしも、何れも其身を晦

鞘して其難を免れたりとの、一時巷説も行はれしが、その両三名が誰なりしかは素より知る由なきも、郡利もその一人に加はりしかとの聞ありしが、郡は其

際、身体を自由を欠くのみならず、且つ父も亦病んで死に瀕し、朝夕其枕頭に待し薬を嘗め居たり。

又其持論たるや、自信自期する所ありて、田原坂の要衝が陥落せば、官兵は続々攻下り、山鹿・南関の官軍と聯絡せなば、彼等は与に起つる機も失すべしとの、自信自期して別に遁走

して身を潜匿するの要もなければ、悠々として自宅に帰臥して、家事を視つ、在りしか、郡家へは寄せざりし事と知らる。(葆潔隠士懐旧談より抄出す)

因に記す。郡利は一時危難を免れしが、渡辺県令の券(眷)顧を得て、県治規則の内議草案の如きにも与りて力ありたり。

又事平ぎて後、共愛会の起るや、郡は一日吉田勲次郎と会話の際、偶然外交条約改正の建議せんと

と図りて檄文を筑前全国に移して、全国の有志者を博多に会して、国会開設と条約改正の二件を建議せん事を決議せり。

(是より先箱田六輔等は大阪なる愛国社の国会開設論に同意せしなり)

於是筑前国一市(区)十五郡五(九)百三十三ヶ村の結合成り、之を各

部の團結に分ちて、其聯合本部を福岡に置く。即ち「筑前共愛公衆会」是

なり。それ等の会憲より建議書は、渾て郡利の起草に成りて、南川正雄・箱田六輔の両名が携带上

京して以て、左院に献疏なしたりき。其要領の旨趣を左に掲ぐ。

第一、民人共同公愛之真理を守るべし

第二、国権を拡張し帝家を輔翼することを務む可し

第三、自任反省国本の実力を養ふべし

又三月二十二、三日の事なりけり。越知彦四郎は地行五番丁なる内田良五郎が

居宅を叩き、声を潜めて謂けらく、「目下田原坂激戦の模様なれば足下を煩わす。今より急行してその斥候を依頼せざるを得ざるの仔細あり」とのことなりしかば、内田は奮つて之を領

き、即座に知迎の人力車夫を雇ひ切り、二人挽にて即ち發行し、その日の暮つ方、筑後の国兼松宿に着し、それより進んで山鹿近辺迄出て行き、田原坂の模様を斥候せんとは思へ共、終日の急行気力も疲弊せしかば、同宿に一泊なしたり。然るに翌午前二、三時の頃より田原坂の方位に当り大砲連発の音頻りに聞へしが、不思議や暁天と共に

その砲声も止み矣、於茲内田は以思(為)へらく、砲音の止みしは田原坂は或は陥落せしにはあらざりしか、果して然りとせば、最早山鹿地方迄出で、斥候するの必要もなければ、直ちに馳せ歸りてその陥落を報道す可しとて、兼松宿より引返して急行帰途に向ふ。

その日の暮つ方、自宅に歸着す。越知は既に來りてその歸りを待ち居たりしが、内田よりの報を聞き、天を仰ぎて長嘆しつゝ、内田へ向ひ「田原坂が陥落しては、最早拙者も一死を決せざるを得ず」と呼(叫)び、直ちに蹶起してその坐を打立たんとしせしにぞ。内田一言すらく「自分は全く兼松にてその砲声の止みしを以て、田原坂は陥落せしものなる可と暗推せしものたり。足下は尚も県庁辺の模様を聞合されよ」と云ふにぞ。(于時県官花房庸夫は、既に越知等が意の在る所を賛成して県庁内の模様を時々窺かに通告せしなり。)

越知は笑ひて「県庁の模様は花房迄は聞きても見やう。足下の斥候によりて、田原坂は陥落せしに相違あるまじと信じて決志せり」と答へ、別れに臨み、殊更に内田に向ひ「内田君よ、内田君、是より愈よ芝居の幕明けだよ。足下は迷

惑ながら小荷駄と彈藥の配布指揮之役割だよ。但し會計一式は浜与四郎が手にて請合居しかば、今は樂屋の準備丈けは整ひたり」と云ふにぞ。

内田は尚も詞をつぎ「それ等のことは幕明きしての跡のことにせらる可し。若しその以前に於てせば、僕の如き馬の蹄役は忽ち警吏に拘引せられて止矣可し」との注意を与へしが、越知は「その辺のことは充分承知して以て注意に注意を加へ居しかば、必ず掛念なく充分に芸当をやりて下されよ」との一語をその坐に遣して先別れけり。

抑も西郷氏が機を以て断然拳兵するや、その沿道所在の有志士は皆起つて之を応援するに意ある如くなりしも、要衝田原坂が敗れしとのことを聞きて、何れも躊躇逡巡して以て事に及ばざりしが如くなるも、嗚呼々々越知はそれに反して、その田原坂の要衝が陥落せしとのことを耳にして、却つて一死を決して、旧盟の宿図を徹せんことを欲し、その身を殺して義を取り仁と成して、以て百代の人心を維持して渝らず。何ぞその義侠なりや。唯此一片の信義、越知の越知たる所以は、全く爰に於て存せしなり。何等の悽愴、何等の義胆、吁咽々々。

### 明治丁丑

#### 福岡表警聞懐旧談 上

清渡野生編述

#### 第五回(続き)

又郡利の懐抱たるや、その旨趣の帰せし所は同一なりしも、曾て福岡県官に在りしことなりせば(病によりて当時閑地に居ると雖も、渡辺県令は重きを郡に

も、渡辺県令は重きを郡に



現在の田原坂=熊本県・植木町